
今でも君を愛してる

望緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今でも君を愛してる

【Nコード】

N8455P

【作者名】

望緒

【あらすじ】

実花は30歳主婦。結婚8年目。子供は小学1年の息子。7歳年上の夫、聡は、4か月前から聡の単身赴任のため別居中。

夫の転勤についていかなかったのは、子供の学校のためだけではなく、本当は去年発覚した聡の浮気で出来た溝がどうしても埋められなかったためでもあった。

この作品は、作者、望緒の前作、「大人になっても」のスピノフ作品です。あわせてどうぞ。

episode 1

11月の晴れた日曜日。

高校からの親友の奈央の結婚パーティーが行われた。

奈央は、別れて閉まった後もずっと

5年も思い続けた彼と、

晴れてよりを戻したと思った途端に結婚した。

奈央は会社じゃ頼れる主任だったらしいけど、

昔馴染みの私から見たら、

不器用で自分の気持ちを出さない奈央が、

このまま一生仕事に人生を捧げてしまうのではとかなり心配したけれど。

どうやら圭司さんも似たタイプだったようで、本当に良かった。

私は、奈央に近づいた。

「おめでとう、奈央。」

本当良かったね。

お腹の赤ちゃんたちは順調？」

そう話しかけると、奈央はこっちを振り返った。

「実花、ありがとう。」

満面の笑みの奈央に抱きつかれた。

しばし二人で抱き合った。

「赤ちゃんつぶれちゃうじゃない。」

そう言って、奈央を離れた。

「順調よ。2人とも。女の子じゃないかって。」

そう言ってお腹をさする。

圭司さんも友達と離れて、近寄って来た。

「実花ちゃん、久しぶり。」

今日は来てくれてありがとう。」

そう言いながら手を差し出してきたので、握手をした。

「おめでとうございます。」

ほんっとうこのままじゃ、

奈央が干からびるって心配してました。」

そう言うのと、にやりと笑いながら

「俺が干からびるのが先だったよ。」

「いえ、相変わらずのイケメンですよ。」

「本当に、実花ちゃんには、俺勝てないもんな。

いつでもうちに遊びにおいでよ。

奈央ももう家にいるし、

まだ家にずっといることに馴れないみたいだから

相手してくれると助かるな。」

「お安い御用ですよ。」

のんびり過ごす方法でも伝授しましょうか？」

こんなに楽しく会話をしているのも、

2人の眩しいくらい幸せそうな笑顔に、胸がちよっぴり痛んだ。

私達もこんな頃があったはずなのに。

そんな思いを無理矢理押し込んだ。

今日は2人を祝う日なんだから。日差しが暖かく、

11月にしては気温も高めで気持ちがいい。

空を見上げたら、ふと涙が浮かんた。

ランチタイムのパーティーだったので、

5時には自宅のあるマンションについた。

そのまま小学1年の息子を、

同じマンション内の友人宅に迎えに行った。

山内、とある玄関には、気の早いクリスマスリースが飾ってある。

インターホンを鳴らすと、すぐに

「あ、お帰り。すぐ開けるね。」

ほんの10秒程で、友人の山内美穂が、笑顔で出迎えてくれた。

「実花、随分早かったのね。

ゆっくりしてきて良かったのに。

巧だっけうちの宗哉と仲良く遊んでたし。」

美穂はいわゆるママ友達なのだが、

同じ年で、子供も同じ年、なんだか気も合っ

あっという間に仲良くなった。

こういう、子供を見られない時など

お互いに預け合っている、貴重な存在だ。

私は実家と疎遠な上、夫は単身赴任中。

そんな私をいつも気にかけてくれる。

「ありがとう、私みたいな子持ちのおばさんは

さっさと帰んなきゃ。

これ食べてね。お土産。」

そう言っけ途中で買っけきたケーキを差し出した。

「ありがとう、とりあえず上がんなよ。」

そう美穂は言っけたけれど、

「この格好だもん、早く帰っけ着替えなきゃ。

太っけかしら？ なんか息苦しいし。」

そう笑いながら答えたら、

「実花は太っけなんかないわよ。私の方よ。

わっけった、巧呼んでくるから。」

そう言っけ玄関の奥に消えた。

息苦しいのは、胸の奥が苦しいせいだ。

そんなの分っけっている。わっけっているもん。

同じマンション内とはいえ、家は3階上になるので

エレベーターで上がっけ帰る。

息子の巧は、夫に面差しが良く似てきた。

まだ幼いその横顔を見ながらエレベーターを待っけいた。

「ママ、何？ 僕の顔何か付いてる？」

今日ね、シュウとね、シュウのママとね
公園も行ったよ。」

はっと我に返って、笑顔を返した。

「楽しかった？良かったね、天気も良かったし。」
そう言くと、さらに明るい笑顔で

「シュウのパパとママと4人でサッカーしたよ。

ねえ、今度はいつパパ帰ってくる？

パパとまたサッカーするんだ。」

「クリスマスの後かな、楽しみだね。」

「うん！」

エレベーターのドアが開いた。

息子と手をつないで乗り込んだ。

夫はこの夏から福岡に単身赴任になった。

こうして離れて暮らすことは、本当に正解だったのか
自問自答を繰り返す。

ついて行かなかった理由は

子供の学校だけが理由ではなかった。

episode 2

息子の巧と二人で夕ご飯。

当然のように、巧の好きなメニューに偏る。

今日はハンバーグ。向かい合ってゆっくり食べる。

「ママ、ご飯食べたたら、パパに電話してもいい？」

いつ帰ってくるのって聞きたい。」

息子はそう言って、ご飯を口いっぱいに押し込んだ。

「別にいいけれど、そんなに詰め込んだら詰まっちゃうでしょ？」

コップの麦茶を差し出すが、巧は一生懸命噛んで飲み込んだ。

「じゃ、電話するね、ママも話す？」

そう言われてドキッとした。

別の用事はない。用事なんかメールで済む。

「ママは、明日の準備があるしいいわ。」

そう必死ににっこりと笑って見せた。

「わかった。」

そう一言だけ巧は答えて、急に話題を変えた

「ママ、今度はドレッシングはゴマがいいな。」

茶碗を洗って、キッチンをモップで掃除をしていると

巧が楽しげに電話をしていた。

「ねえ、パパ。クリスマスはサッカーボール新しいのが欲しいな。」

嬉しそうにおねだりをしている姿から目を逸らした。

モップのゴミを掃除機に吸わせて機会を止めると

巧が電話を握ったままやってきた。

「ママ、パパが代わってって。」

心臓が一瞬飛び跳ねた気がした。

「あ、そうなの？」

そう言って巧の差し出すコードレスの電話を受け取った。

「もしもし。」

おそろおそろそう言うと、一瞬遅れて聡の声がした。

「実花、変わったことはない？」

少しかすれて聞こえる。

「特には、今日は奈央の結婚パーティだったの。」

巧は美穂が預かってくれたの。」

「ああ、奈央ちゃんの。」

「あなた声がかすれて聞こえるけれど。」

「ちよつと風邪気味でね、大したことないよ。」

なんだか罪悪感を隠せない。私のせいで風邪をひいたようなそんな錯覚まで起こしてきそうだ。

「ちゃんと・・・食べてる？」

「大丈夫だよ。巧のこと一人任せてすまないな。」

何かあったらすぐ電話しろよ。」

「うん・・・」

電話の様子で察したのか、巧が横から騒ぎ出した

「ママ、切る前に代わってよ!!」

「あ、巧がまだ話したいって。」

「・・・ああ、じゃ代わってくれ。」

巧にまた電話を差し出した。

なんだか顔の中に何か違和感を感じる。

何かが膨れ上がる。そんな感覚。

必死に平常心を取り戻そうと深呼吸した。

もう泣くのはたくさんだ。

天井を見上げて、あふれそうなものを必死に戻した。

私は心が狭いのかもしれない。

この胸の奥のわだかまりを、どう処理していいかわからないまままだ。昨年夏からずっとこだわっているのは私だけなんだ。

7歳上の聡と出会ったのは、高校生の頃だった。初めて会ったとき、聡は高校の教育実習生だった。一目で気になったけれど、その時はそのままで再会したのは社会人になってから。

短大を出て就職した会社で、結局教職には就かず就職していた聡と再会した時は正直これが運命だと思った。

聡は教育実習中ももてていた。

私は遠巻きで見ただけだった。

社会人になって部署が一緒だったことと

その時の話題で親しくなれて

2年交際して結婚した。そして息子が生まれて

優しく子煩悩な聡と、幸せに暮らしていた

去年の夏までは。

episode 3

私たちはずっと愛し合っていると思っていたのに。

息子の巧も来年は小学生という年になった。

育児もなんとなく楽になって

そろそろパートにと思い、

近くのショッピングセンター内の

小さな子供服店にパートで店員として働き始めた。

週4日、昼間のみのパート。

給料は少なくても、久しぶりの社会に

やりがいを感じていた。

なので夫の些細な変化に私は気付けなかった。

言い訳にしかないけれど。

聡は一時教職を目指したせいか、統率力に優れていて、後輩にもとても慕われていた。

悩み事の相談に乗ることも多く、それは女の子に至る事もあったけれど、私は聡を信じていた。

それは青天の霹靂。

その女の子は突然私の前に現れる。

その日曜日はたまたま、社員の1人が、結婚式に参列するから休みを取った。

誰も都合がつかないらしく、聡に子供を頼んで、四時間だけ仕事について、帰宅途中だった。

駅を出ると、若い女性に呼び止められた。

「すみません、藤田聡さんの奥様ですよ。」

背格好は私とあまり変わらないが、着ている服の質はよく、きちんと靴バッグまでまとめられていた。髪型もゆるく巻かれたロングヘア。

派手でも地味でもなく、キレイなOLって感じ。

「はい、そうですが。」

そう答えると、彼女はうつすら笑みを浮かべた。

「私、藤田係長と同じ係で勤務しています。」

相沢佳奈と申します。」

そう言われて、ほぼ反射的に、

「そうなんですね、いつも藤田がお世話になります。」

と笑顔で答えた。

相沢さんは、一瞬眉をひそめ、そして一気に捲し立てた。

「私、藤田係長に本当にお世話になってるんですよ。」

誰よりも聡さんを愛してます。」

理解するのにどれだけかかったろう。

間抜けにも

「そうなんですね。」

と返事をしていた。

駅前のファミレスになんとか誘われ席についた。

そこで、相談に乗ってもらっているうち好きになったこと、思いきって誘ったら乗ってきたこと。

彼女は25歳で、他の彼氏はいないこと。

本気で好きだということ。

一方的に話はじめた。

ただ私はボンヤリ彼女のネイルを見ていた。
キレイなネイル。

きれいだなんてそこばかり見ていた。

一時間弱、そこで我慢出来なくなり無理に店から出た。
不思議と涙は出なかった。

現実的じゃなかった。

マンション近くの公園の前で足を止めた。

聡が、息子の巧の自転車の練習に付き合っていた。
自転車の後に立ち押しながらついて走る。

その姿とさっきの話が絡み合い、叫びたくなった。

私はマンションへ走った。

涙はまだ出なかった。一時間もしないうちに、2人はご機嫌で帰ってきた。

「ママ、帰って来てた。」

玄関から巧が走り込んできた。

「ママお帰り。あのね、自転車乗れたよ！」
興奮冷めやらぬ巧に、

「ただいま、手は洗ったかしら？」

そう言うと、

「はい、ごめんなさい。」

そう言って巧は、洗面所にむかった。

続いて聡が入ってきた。

「実花お帰り。俺も手洗わないとな。」

そう笑顔で洗面所に消えた。

巧が眠るまで

眠るまで、泣いてはいけない。

私は普通を装い食事の支度を始めた。

episode 4

昼間、疲れたようで、巧はいつもより30分も早く眠ってしまった。
巧の部屋から居間に戻ると、聡は有料放送でサッカーを見ていた。

「お茶とコーヒー、どっちがいいかしら？」

そう聞くと、画面を見たまま

「コーヒーかな？インスタントでいいよ。」

そう答えた。

黙ってコーヒーをいれた。

2人分のコーヒーを入れ、ソファーに並んで座らず、机の角を挟んで斜めき向いて座った。

コーヒーを置くと、聡は、黙って手に取った。

テレビに見入ったままだった。

昔なら、ありがとうって言ってたかもしれない。

こんな事は日常の当たり前の事になっていた。

それでいいのかもしれない。

でももしかして、それはいけない事なのかもしれない。

自分の分のカップの表面を暫く見つめていた。

話のきっかけが掴めなかった。

もしかしたら、相沢佳奈の妄想の世界かもしれない。

でもそうだったとしても

やっぱり真実は確かめないといけないのかもしれない。

でも、何かが壊れそう。

今の生活が壊れてしまう。

そんなの嫌だ、そんなの・・・。

今の生活を壊したくない。

聡は子煩悩のいい父親で、いい夫で、自慢の夫。

そんな彼を失くす勇気が私にあるのかしら。

でも、このまま、なかった事にも出来ないよ。

「実花」

突然呼ばれて驚いた。

「俺、来週の週末飲み会入ってるから。会社の。」

思わず、昼の事が生々しく蘇った。

彼女の整った顔立ち、綺麗なネイルの指先

新品のように痛んでない靴。

それに引き換え私はどうだろう。

荒れた指先、ちよつと前のバッグに靴。

手入れのいらない髪形。

こんなだからいけなかったのかしら？

そんな思いに胸がつぶれそう。

「ねえ、聡。その飲み会に相沢加奈さんはいるのかしら？」

瞬時に聡の表情が変わった。

ああ、本当なんだ。

彼女の妄想とか思い込みでなくて、

何か本当にあるんだ。

私は目を閉じた。

私は、壊し始めてしまった。

この幸せな生活に、石を投げたんだ。

そんな覚悟はあったかどうかかわかんないのに。

有料放送のスポーツチャンネルのサッカーの試合。

ゴールが決まったらしく、中継のアナウンサーの声が
静まり返った居間に響いた。

なんかごまかしてくれれば

私だって救われるのに、

そんな表情で黙りこまれたら

もう救いようがないじゃない。

episode 5

「実花、その名前はどこから聞いてきたの？」

長い沈黙の後、聡から囁くように問いかけられた。

「今日、駅で。多分私を待ってたんだと思う。」

聡がはっと顔を上げ、私を見た。

「本人がか！」

「うん。」

聡は頭を抱えた。

「なんて言ってた。」

うつむいたままそう聞くので

「私は、それよりあなたから話が聞きたい。」

何がどうなっているのか説明して欲しい。」

私が話した後聞いても、それは取り繕った言い訳にしか聞こえないもの。

聡は深呼吸して話し始めた。

「相沢君は、同じ仕事場の人だ。」

前の彼氏との話を相談に乗ってただけけれど

いつの間にか彼氏と別れてしまった。

半年くらい前から、飲み会になると

近くに寄ってきてて、メールも頻繁になって

露骨なアプローチもあった、でもな

俺も、お前と巧が大事だし、うまくはぐらかして

来たつもりだったんだけれど。」

けど?????

「けど、なに？」

「先月の飲み会で、俺ちょっと飲みすぎて、目が覚めたら彼女の部屋にいたんだよ。」

今度は思わず私が頭を抱えた。

「俺は、あれだけ酔ってたら何かあったとは思えない。
でも、彼女は・・・」

そのまま聡は下を向いて黙った。

「やっちゃったって言うのね？」

「そう言うことだ。あくまで、俺は絶対ないと思う。」

そのまましばらく沈黙が続いた。

私も小娘じゃない。泥酔したら確かにそうだろう。

でも彼女が一方的に嘘をついてるって証拠はないのだ。

「相沢君はそこから、急に積極的になったって言うか。
急になんだか、笑い出したくなった。」

こんな事が私の身に起こるんだ。

起っちゃうんだ。嘘みたい。

夢ならいいのに。起きて笑い飛ばして。

こんな夢見たのよ聡って、笑いあえる。

「俺は、お前と巧との生活を壊そうなんて
これっぽっちも思っていない。」

そこは・・・信じて欲しい。

昨日、確かにメールが来て

明日、つまり今日あって欲しいって

でも、俺は、実花が仕事で子供と約束があるって
そう返事して、一緒に子供と遊んでもいいかとか
返事が来たけれど、きっぱり断ったんだ。」

「・・・だから私を待ち伏せしたのかもね。」
独り言のように呟いた。

聡はなんにも言わなかった。

コーヒーはすっかり冷めてしまった。
ちよつと冷静にならないと。

聡のカップと私のカップを持った。

「レンジで温めなおそうか、コーヒー。」

現実を見るのが辛い。

なかった事にしたい。

それだけがぐるぐる頭を回っていた。

いつの間にか2時間も経ってた。

電子レンジの中の2つのカップをぼんやり見詰めた。

episode 6

昔から、聡の周りに人が集まる光景を目にしてきた。

教育実習で私のクラスに来た時も、

聡の周りには、同級生の女の子が群がった。

私は、遠巻きに見ているだけだった。

会社に入って、やっぱり聡は輪の中心だった。

高校時代の話のおかげで近づけたようなもの。

私はいつも、その輪に割り込んで入れない

でも、そんな聡が好きで、自慢だった。

私たちは夜更けまで話した。

聡にとっては、恋愛感情はなかった、と言う。

ただ、相談を持ちかけられて、乗っただけで、

普段、仲間に対して取っている態度と変わらなかったはずだと。

でも、ぽつりと聡は言った。

「でも、俺の中に、女の子に頼りにされる事に

驕った部分があったのは否定できないし

その俺の態度が、彼女に勘違いさせた部分は

否定できないかもしれない。

そこは俺も認めるよ。ごめん実花。」

今まで、聡は、嘘なんかついた事がない。

いつも、どんな時も、だから信じる。

聡の言葉は信じられる。そう思ってきた。

でも、彼女の姿を思い浮かべると、

なんだかどす黒いものが胸を占める。

午前2時を回って、眠る事にしたけれど。

眠る事は出来ずにいた。

寝返りを打つと、聡の手に触れた。

ドキッとして一瞬離したけれど。

切なくて、

気持ちが悪くて、そっと手に再び触れた。

温かい手をそっと握ると

ぎゅっと握り返してきた。

聡の顔を見たけれど、目を閉じたままだった。

私はそのままそっと目を閉じた。

何かが壊れることがたまらなく怖かった。

私たちは、手をつないで眠った。

その手を離したら、2度と繋げなくなるような気がして。

朝、起きた時、まだ手は繋いだままだった。

どんな事があっても、朝は必ず当たり前のように来る。

このまま手を離したくない、そんな気持ちだけれど。

起きないと、巧を起こしてこない。

そっと手を離すと、聡は目を開いた。

合わせた目線をどうしていいかわからず

そのまま、見つめていた。

聡も私の目を見つめていた。

最近、こんなにお互いを見た事があっただろうか。

忙しさにかまけ、生活のささいな苛立ちに

目線をそらしていなかっただろうか。

この人の瞳の色を、久しぶりに思い出した。

「実花、おはよう。」

聡が囁いた。

「おはよう、聡。」

どうしていいのかわからない。

立ち上がってカーテンを開けた。

いい天気で部屋がさっと明るくなる。

「実花。」

声を掛けられて、振り返るべきかどうか一瞬迷った。

「俺は、実花と巧が俺のすべてだから。」

分かっている、分かっているのよ。

深呼吸してみた。

心の靄を吹き払いたい。

でも、全部は払えない、でも伝えなきゃ。

「聡は嘘なんかつけないよ。信じてる。」

明るく、出来るだけ明るく笑みを浮かべて、
私は大きな声で言った

「さあ、巧を起こさなきゃパパ。」

学校遅刻しちゃうし。」

もやもやは晴れてはいないのに。

私は無理矢理それをなかった事にした。

聡と巧は一緒に家を出た。

パパと学校に行くのは巧の楽しみな日課。

嬉しそうな息子の声が救いだった。

背の高い、スーツ姿の、その後ろ姿を見ていた。

見えなくなるまで、ずっと。

何年振りかに。

朝食の後片付けをしながら、脳裏には昨日の事が
繰り返し再生されてしまう。

今日も会社で顔を合わせるのだろう。

たとえば聡の言う事ばかりが真実でも

あれだけの事が出来るのは彼女の中で

何か思い込めるだけの事があつたんだろう。
考えれば考えるほど、信頼すると言つたはずの気持ちが悪える。

episode 7

6月に入っても、雨は少なく、今日だってとても良い天気で、駅に向かう道のりを、日傘を差して歩いた。

なんとなく昨日の場所が近づく、またいるんじゃないかとドキドキする。

それでいて、あれは夢だったんじゃないかと思う気持ちもある。

「藤田さん、藤田さん。」

「どうかしましたか？」

ふっと呼ばれて我に帰った。

私、品出しをしていたんだった。

床に膝をついて、段ボールに手を入れたまま、つい考えていたらしい。

開店前とはいえ、こんな失敗を。しっかりしないと。

店長が私を覗きこんでいた。

「藤田さん、どうかした？」

「いえ、すみません、」

仲沢店長、来てたんですね。」

あたふたと立ち上がると、

店長はちよつと笑いながらも

「今日のシフト、妙子ちゃんだったでしょ？」

彼女熱があるって電話が来てね、

代わりに俺が店に出るから。」

店長の仲沢さんは、実は私より1歳下の28歳で、

チェーン本部から出向してきている。

年下が上司って私も年を取ったのかしら、

と最初はちよつとため息が出たものだ。

「まさか藤田さんも具合悪いとか？」

不安そうな顔の店長に。

「大丈夫ですよ、ちょっと考え事してただけ。」

力瘤を見せるようなポーズでおどけて答えた。

「俺、さすがに1人で店番出来ないし、お願いしますよ。」

ちよっと心配そうに言う店長は、弟みたいに感じる。

「もう開店ですよ。」

私はこっち続けますから、レジ開けて下さいね。」

レジのカギを差し出すと、受け取った店長の手が触れた。

店長はドキッとしたのか一瞬手を引っ込めた。

「あ、すみません。」

そう言っ、レジに向かう店長は、ほんのり顔が赤いようだった。

あのね、手が触れただけだし。

本当に生真面目なのよね。

思わずクスッと笑いが込み上げる。

不器用なのよね、店長は。

さて、昨日のことは忘れて仕事しないと。

夏物が追加で沢山入って来てるもの。

ハンガーにかけて並べる作業に没頭することにした。

今日は早出だったので、3時に仕事を上がった。

パートで入った仕事だけど、仕入れの管理やら一部任されて、なかなかやりがいを感じられるようになった。

「じゃ、お先に上がりますね、店長。」

バックヤードでパソコンに見入っていた店長は顔を上げた。

大学卒業まで陸上をやっていたらしく、筋肉質の体つきと凛々しい顔は、

子供服店長と言うイメージではない。

一年間出向して、本部に戻るといふ話を聞いた事がある。

「お疲れ様でした、昨日は日曜出勤すみませんでした。
明日も宜しく願いしますね。」

笑顔で堅苦しく挨拶するのももう見慣れた。

「いえ、都合があればいつでもやりますから、遠慮しないで下さいね。」

じゃ、お疲れ様です。」

そう言ってドアを出ようとしたとき、

「藤田さん。」

急にまた呼ばれた。

振り返ると、店長はまた心配そうな顔で。

「なんか元気ないですよ。」

そう呟いた。

思わずその優しさが嬉しくて、

「大丈夫、私頑丈に出来てるのよ。」

そう笑って見せた。

「それならいいけど、無理しないで下さい。」

ちよっぴり泣きそうだった。

「ありがとう。」

そう言って足早に去るしかなかった。

その日、聡は10時を過ぎても戻らなかった。

あえてメールはしなかった。

もしかして、相沢さんと話をしているかも、

そしたら、きっと私のメールに気まずいことになって、

聡はウソつかないといけなくなるかも、とか考えていたら、
メールを打てなかった。

巧は寝る時間だ、パパがいないことに文句を言いながらも部屋に入った。

長い夜がまた来た。
ため息が出た。

胸の中のどす黒い何かは
私の中で増殖する。

信じているのに、なぜ？

episode 8

「ママ、ねえママ。」

巧の声で我に返った。

聡が単身赴任になって、巧は急に大人びた気がする。

小学生になって環境が変わった事もあるのかもしれないけれど。

話し方もすっかりしてきたし、

行動も、衝動的に騒ぐような事も減ってきて

真面目に宿題に取り組んでいる姿は

見ていて大きくなったなあ実感する。

「ママ、パパね、クリスマスには間に合わないって。

28日に帰って来るって。

プレゼントはその時にだって。

サッカーの試合29日だね。

パパ見に来てくれるって。」

矢継ぎ早に話す巧に、

なんだか申し訳なくなる

巧をパパから引き離したのは私。

今住んでるマンションだって賃貸だし、

仕事だってパートだし、

巧だって新学期から向こうの学校にだって

行けたんだけど、

私のワガママで東京に残ったようなものだ。

友達と離れるのがかわいそうとか、

仕事が軌道に乗ってるとか、

九州で暮す自信がないとか、取って付けたような理由ばかり。

それでも、聡は一言も反論せず、

「分かってるよ、何年かの辛抱だから俺が一人で行くのが当たり前だ。」
って言った。

当たり前なんかじゃない、分かってる。

「巧、寂しい？ パパがいないと。」

聞くつもりはなかったのについ口をついた。

巧はちょっと困った顔をした。

余計なこと聞いちゃった。後悔したけれどもう遅い。

「ママもいなかったら寂しいよ。」

小学校一年生とは思えない返事が返ってきた。

「ごめん、嫌なこと聞いたね。」

そう言うのと、ニコツと笑って

「テレビ付けていい？」

そう話を変えて来た。

子供に気を遣わせるなんて、私は最悪だな。

巧はテレビを付けて、お笑い番組にチャンネルを変えた。

テレビの中からは大きな笑い声。

家の中に寂しく響いた。

待ち伏せされた後は、

相沢加奈さんは、その後しばらくは静かだった。

でも、6月の終わりになって、

見知らぬメールアドレスからのメールが携帯に入った。

梅雨の晴れ間で、溜まっていた洗濯物に

追われていたので、メールを開いたのは

2時間後だったが、その間に5通も入ってた。

全部タイトルは無題になっている。

古い方から開いて、私はその場に立ち尽くした。

さっさと別れればいいのに

その言葉が繰り返し入力されていた。

画面ぎっしりにその言葉が並ぶ。

あまりに狂気じみたメールに手が震えた。

震える手で2通目を開いた。

ムカつく、死ねよ。無視するな！

3通目は

あんたのせいで聡さんと付き合えないんだ、消えろ。

4通目からは開く事が出来なかった。

体が震えて止まらない。

あの人、会社にいるんじゃないの？

仕事中にこんなことやってるの？

私のアドレスどこから手に入れたの？

怖い、怖い・・・

湧きあがる恐怖感で、私は窓を全部閉めた。

玄関も鍵をかけ、カーテンを閉めた。

一気に部屋の気温が上がる。

もったいないけれどエアコンを入れて

震える指で聡にメールを入れた。

出来ればすぐにでも電話を入れてと。

時間は午前11時半。昼休みまでかかってこないと思ってたら

5分もかからず電話がかかってきた。

その着信音で私はびくつとした。

聡の名前を携帯の画面で確認して

「さ、聡？ごめん仕事中に。」

「いや、今まで実花がこんなメールしたことないし、なんだ、何かあったのか？」

その声に、急に涙があふれて来た。我慢できない。

「どうした、実花。泣いてたら分からない。」

聡が電話の向こうで動揺したのが分かった。

メールすべきじゃなかったのかな。

仕事中だし、終わるまで我慢するべきだったのかな。でも、怖くてたまらない。

どこかで私を見ているような気がした。

「どうしてあの人私のアドレス知ってるの？

怖い。会社にいるんじゃないの？」

ガタガタと自分が震えているのがわかる。

なんとことはない、ただのメールだ。でも怖い。

こんなの普通じゃない。

文字の羅列なのに、ただならぬ思いが感じ取れる。

「アドレスって？メールか？」

「うん。」

「実花、落ち着け。」

そのメール、俺の携帯に転送できるか？」

「多分・・・」

聡がゆっくり言い聞かせるように言った。

「いいから、そのメールを俺に転送してくれ。」

それからまた電話するから。泣くな実花。」

「うん。」

「じゃ、一回切るぞ。いいか落ちつけよ。」

そう言って電話が切れた。

私はキッチンの隅で小さくしゃがみこんで

そのメールを聡に転送した。

4通目と5通目は開かないまま転送した。

その日は開く勇気が出なかった。

私はそのまま、台所の隅でぼんやりしていた。

こんな事が私の身に起こるなんてね。

そうぼんやりと呟きながら。

episode 9

あの時、なんだか映画を見ているような、非現実感を感じた。

あの日、私は、巧の保育園の迎えの時間まで

カーテンを閉めた室内で毛布を被ってうずくまっていた。

でも、時間になっても外の出る勇気が出ない。

どうしよう、どうしよう。

でも、足がすくんで動けない。

保育園の迎えは、同じマンションのママ友の美穂に

「どうしても具合が悪くて。」

と帰ってもらった。

美穂は心配そうな顔で玄関の前に立っていた。

巧を部屋に入れ、美穂に礼を言う

鍵をかけて家に閉じこもった。

様子のおかしい私に、美穂は何か言ったが、

あまり覚えていない。

多分、見てわかるほど動揺していたんだと思う。

聡は、転送したメールを見てすぐに電話をしてきたが、

聡の方も動揺していて、話している事が良く分からなかった。

ただ、相沢さんは今日は会社に来ていないこと。

メールを着信拒否設定にしておくようにということ、

後は、玄関のカギはきちんとかけておくこと。

うちのマンションは一応入口は自由には出入り出来ないけれど
用心しておくようにきつく言われた。

黙って聞いていると、

「実花、ごめんな。これだけは信じてくれ

この間話した事以外は本当は何もないから。」

ため息のような聡のささやきを聞いて

信じたいと言う気持と、何かもやもやした気持ちと入り乱れる、聡の動揺も手にとって分かった。

それをどう解釈していいのか自分で判断できない。

「うん、分かってるよ。」

そう答えたけれど、本心は自分でもわからなかった。

その夕方、私の携帯が鳴った。

聡かと思って、折りたたみの携帯を開くと

私がまだ、聡の会社にいた頃の同期からの電話だった。

早苗、という文字にほっとし、通話ボタンを押した。

「もしもし。」

「もしもし、実花？ごめん、私のせいだ。ごめん。」

そう言って、早苗は謝った。

「相沢にアドレス教えたの私なの。」

実花に世話になったから、お礼がしたいから連絡先が知りたいって、

藤田さんに言うと、そんなのいいよって言われたけれど

気が済まないから教えて貰えませんでしたって言われて

まさかこんなことになってると思わなくて。

藤田さんが、相沢がいるかって聞きに来たとき、今日もしかして

実花に連絡取っているかもって言ったら、

ちよっと来てって言われて、

話を聞いたんだ。本当ごめん、私が余計なことしちゃった。」

違う、早苗は悪くない。

私だって同じように言われたら教えちゃうかもしれない。

「早苗のせいじゃないよ。」

「あの子ね、半年くらい前に彼氏と別れて、

ちよっと思ひ込みが激しい所があるの。

かなりその彼氏にも付きまತ್ತたみたいでね、

多分、藤田さんはみんなに優しいのに勘違いしているのよ。

私、今から相沢の家に行くから、

本当にごめんね。」

早苗は涙声だった。あのメールも見たのかもしれない。

「早苗、心配掛けてごめんね。」

「こっちこそごめん、後でまた連絡するから。」

そう言って早苗は電話を切った。

胸の中のつかえはそう簡単に取れそうにない。

大きいため息をついても、何かがたまっている感じ。

「ママ？お腹空いた。」

いきなり後ろから巧が話しかけて来た。

「あ、ごめんごめん。」

お腹空いたよね。」

「パパ？今日早く帰って来る？」

「まだわかんないなあ……」

電話する勇気が出ない。

話をする気分になれない。

なんか複雑な気持ちに声に出そうだ。

「ご飯作るね、もうちょっと待ってて。」

ご飯の支度をしながら、考えてたら

もしかして巧が狙われたかもしれない。

自分の事でいっぱいじゃないで、美穂に頼んじゃったんだけど

もしかして、そこを狙われたかもしれない。

巧を守るこの方が優先だったのに。

そう思ったら、心臓がすごい勢いで鼓動を打った。

この子を守る方が優先じゃないの？

私がしっかりしないといけなかったのに。

目に涙が溢れた。音を立てたように感じるほど勢いよく。

相沢さんのアドレスは着信拒否したので、その後は入ってこなかった。

だからまた来てたのか、本当に来てないのかは分からない
それがまた不安の種になった。

こんなに電話の音に怯えて過ごすなんて、
こんなに電話が怖いなんて考えたことなかった1人で考えていると、
身の置き所に困るくらい不安なのに、聡は10時を回っても帰って
こない。

それどころか、電話もメールもない。

これはどう解釈していいのだろう。

でも、自分から電話をかける勇気もないなんて。

episode 10

こんなに簡単に信頼とは薄れるのだろうか？
信頼できなくなる私が悪いのだろうか。

人の気持ちは移ろいやすい。

そんな事はわかっていているけれど、

私は聡を信頼していたはずなのに。

私は居間のソファでテレビも付けたまま
うたたねしていたらしい。

ソファが軋んだ気配で目が覚めた。

聡が隣に座り、私の髪に手を触れていた。

ドキッとしたけれど、ゆっくり目を開けて

「おかえり。」

そう一言呟いたけれど、聡は無言のままだった。

表情は無表情で、でも、顔色はとても悪く見えた。

聡は、私の髪に手を触れたまま。

ほんの30秒ほどだったけれど

そのまま、お互いを見た。

「不安だっただろう。ごめん遅くなって。」

そう私の目を見て言った。

「鈴木早苗ちゃんに協力してもらって、相沢君を

探したんだけど、見つからないんだ。

とりあえず休みは今日だけ出たから、

明日鈴木さんが話をするって。

ごめん、怖かったろう。」

そう優しく言われると、涙が止まらない。

「ごめんな、結局俺がいい顔ばかりしていたせいかもしれない。

頼られることにどこか優越感があつたのかもしれない。

こんなことになるなんて思わなかった。」

私からゆっくり手を離し、ソファーにもたれかかって聡はため息をついた。

「俺、風呂に入って来るわ。」

聡はゆっくり立ち上がった。

「あ、ご飯は？」

「ああ、食べるよ。」

時計を見ると11時半だった。

立ち上がって、晩御飯を温め始めた。

聡が帰ってきた事に私はホッとしていた。

それあ、もしかして帰ってこないかもしれないって

自分が思っていた事に気がつかされた。

ただ、彼を信じていればいい。

揺らぐことはない。

でも、たったそれだけの事が

どうしてこんなに難しいんだろう。

たったそれだけの簡単なことなのにね。

眠れないまま夜を明かした。

ベッドで寝がえりを打つと、同じように

息をひそめている聡がいる。

彼もきつと眠れないのだろう。

でも、そんな聡に、眠れないの？と声をかける気持になれなかった。

ひたすら私も寝たふりをしていた。

白々と外が明るくなっていく。

目ざましより早めにベッドを出ようと起き上がった。

その途端、腕を引っ張られた。

ぐっと引き寄せられて、ベッドにまた倒れこむ形になった。聡の体の上に、引き寄せられて。

ドキドキした。でも、その温かみに

緊張していた心が一気に緩んだ。

声を上げて泣いた。こんな泣き方したのは子供のころ以来。聡はただ、抱きしめて頭を撫でてくれた。

怖かった、まだ怖い。

でもそれより何より、心の底から信用できていない自分が嫌だった。

この温かい腕が、誰かに取られるのは嫌。

そんな事も思っている自分に気持ちの整理が出来なかった。

朝ごはんの食卓は、巧がずっとしゃべっていた。

一見穏やかな風景なのに、どこかわだかまりがあった。

巧が歯磨きに行っている間に、聡が

「実花、今日は休んで家にいれないのか？」

そう聞いてきた。

出来ない事はない。でも、家に一人にいるのも嫌だ。

「今日は、休みの人がいるから。」

そう答えた。

「そうか、何かあったらすぐ電話していいから。」

「うん。」

何か、あったら嫌だ。

だから仕事に行くの。なんて言えない。

さすがに寝不足が体に堪える。

それは聡も一緒だとは思うけれど。

伝票をチェックしていると、店長が話しかけて来た。

「藤田さん、なんか顔色悪いですよ。」

ふっと顔を上げると、店長は心配そうに私を見ていた。

「気のせいですよ。大丈夫。」

「でも、なんか元気ないから。」

「大丈夫ですよ、本当に。」

にっこり笑って答えると、店長も微笑んだ。

爽やか系の店長、笑顔は本当にいい男だな。

なんて口には出せないけれどね。

「藤田さん、悩みがあるなら言ってよ。」

藤田さんが倒れたりしたら困るよ。」

そう言われると、ちよっと照れるじゃない。

「わかった、そのうちドロドロした悩み打ち明けちゃうから。」

首洗って待って。」

そう言うのと、店長は手をさっと上げて去って行った。

そんなに顔に出てたんだろうか。

疲れたのは確かだけれど。

本当は誰かに打ち明けたい。

でも、打ち明けたら解決するわけでもないし。

所詮、私の問題は私が解決しないといけないんだ。

なんだかこの世で私が一番孤独なような気分になって、

必死に頭の中で打ち消した。

episode 11

あのメールの日から2週間たった。

実はその後の事は聡は何も言わなかった。

私も何も聞かなかった。

熱いお風呂のように

かき混ぜて余計熱さを感じるような

そんな事をしたくなかった。

私たちは、ぎこちなさを隠せずに毎日を過ごした。

梅雨も本番に入り毎日じめじめした日が続く。

聡の帰宅時間は、毎日毎日巧に会えないような時間帯だった。

日曜日も出かけて行った。

どこに行くの、誰と会うの？

その言葉を口に出せずに

私は聡に背中を向けた。

逃げてる、逃げているのはわかっている。

言いたい事を噛み殺したままの生活。

私たちは頼りない氷の上を歩いているようなものだった。

こんな状態をいつまで続けるのだろうか

限界かもしれない、そう思っていた。

その日も、聡は10時半に帰宅した。

帰った途端、シャワーを浴びると言って浴室に消えた。

台所でぼんやりしていたら、あつという間に浴室から

出て来た聡が目の前に立っていた。

「実花、ちょっといいか？」

居間の方向を指さした聡に、心臓が止まりそうになった
何の話だろう、得も言われぬ不安感に潰されそうになった。

足がすくんで動けずにいると、
黙って聡は私の手を取って、引っ張って歩いた。

優しく肩を掴まれて、座らされた。

いつになく真剣な表情で聡は話し始めた。

「この間から、何も言わずにいてくれてありがとう。

責めたい気持ちもあっただろうに、

聞きたいと思っていただろうに、我慢していたんだろう？」

思いがけない話の始め方にびっくりして聡を見た。

「結果から言うと、彼女は田舎に帰った。

ご両親が迎えに来て、カウンセリングを受けさせるって。

会社には退職願を出したんだ。」

思いがけない話の展開に、思わず瞬きを繰り返した。

「辞めちゃったの？」

「他にも問題を起していて……

会社から実家の方に連絡して、そのことで連日いろいろあって、
帰りも遅くなって、実花に説明しようかと思ったんだけど

半端な状態で話をして、安心させられないし

実花も黙って信じてくれてるんだからと思って。

これで一応解決したから、安心していいよ。

田舎は青森だから、会う事はない。」

これって解決なの？心にちょっと引っかかった。

その夜、またなかなか眠れなかった。

でも、聡は疲れ切っているようで、あっという間に眠っていた。

月の明るい夜で、電気を消していても

聡の寝顔が見れた。

しばらくぼんやり眺めていたが、おもわずそっと頬に触れてみた。

触っても何の反応もないくらい熟睡していた。

「疲れたのね、聡。」

ぼそっと独り言を呟いた。

聡もあれから一人でいろんなこと抱えていたのだろう。
ほんの少し痩せたように見える。

黙って信じていた訳じゃない。

毎日いろんなことを考えていたの

あなたを信じていると口では言っている

心の底は違っていたのかも。

そんな罪悪感が湧きあがる。

私はそんな格好良くなかった。

物わかりのいい妻なんかじゃない。

押しつぶされそうな心に耐えきれなくて

眠っている聡にそっと寄り添って眠った。

本当はぎゅっと抱きつきたい気持ちを隠して。

翌日からいつも通りの日々が始まった。

表面は、とりあえず表面だけは。

そのコーティングの下はヒビだらけでも。

聡は巧と幼稚園へ向かい、笑顔で見送る。

夕飯を3人で囲んで、3人でテレビを見て

3人で歯磨きをして、お休みなさいと言う巧に笑顔を送る。

そんな生活に戻った

私の気持ちは、どこかに宙ぶらりんなまま。

代休で休みだと言う早苗が電話をしてきて

2人でランチに出たのは、夏の休暇の前だった。

個室でゆっくり食べられる和食の店のランチに

早苗が誘ってくれたから。

ゆっくり食事をしながら、早苗は話始めた。

「実花、藤田さん、どう？ 元気？」

意外な切り口に思わず。

「へ？ 会社で会ったりしないの？」

そう言うのと、早苗は話しくそうに言いだした。

「藤田さん、会社で目立たないようにしているみたい。

相沢があんな噂を流したから居づらいのよ。」

「え？」

「何も、聞いてないの？」

やっぱり聡は何か隠していた

「お願い、教えて。あの人が今どんな状況にあるのか。」

何かおかしいと思っていた。

から元気そんな感じなのだ。でもそこに触れられなかった。

早苗はためらいながらも話してくれた。

相沢加奈が会社で、聡と付き合っていると触れまわった事。

奥さんにばれたから捨てられたと触れまわった事。

会社で聡は嚴重注意を受けていたこと

相沢加奈さんは実は他の社員とも同じように

付き合っていると嘘を触れていたため

ご両親が出て来た事と、精神安定剤を飲んでいたこととか

その噂を流された他の社員も、聡と同じく

覚えはないが関係したと言い張られていて

多分、彼女の嘘ではないかと言う話。

「藤田さん、正直今、立場がない状態で、

大丈夫かなって心配しているのよ。」

知らなかった、毎日普通の顔して帰ってきて

普通に会話して辛そうな顔を見せなかった。

私には言えないって思っているのだろうか。

それはそれでまたショックだった。

でも、そうさせているのは、私のせいかもしれない私の態度のせいかもしれない。そう思うと心苦しかった。私がつとしつかり聡を信じて支えるべきだった。自分の度量の無さが情けなくなった。

だからと言って蒸し返して話し合う訳でもなく、ただ日々は過ぎた。

夏が終わり秋を迎えようとしていた。

episode 12

溝を埋められないまま日々を過ごし、私も仕事に没頭するようになった。

パートの時間を少し伸ばして働くようになった。

元々パソコンに強かったので、店長の代わりに仕事をすることも多くなった。

「実花さんさあ、正社員になればいいのに。」

店長は不意にそう言った。

「その気があれば本社に話すけれど。」

その店長の申し出に、即座に首を振った。

「まだ、子供が小さいし・・・」

「子供かあ、俺ほぼ同じ年なのに結婚もしてないし。」

そう言う中沢店長はため息をついた。

「結婚したらいいじゃない。」

そうちよつと意地悪く答えると

「相手がいないものは仕方がない。」

ちよつと意外で、私は思わず顔を上げた。

「彼女いないの？うそ！」

「なんか傷つくな。」

わざとらしく落ち込む店長に思わず笑いが込み上げる。

最近なにかと笑いを取ろうとする店長と話すのは楽しい。

「なんで彼女いないのかしら？」

さらにわざと意地悪く続けた。こんなに楽しい人なのに。

店長はふつと笑って

「好きな人はいるんですけれどね。」

そう言った。なんだか複雑な心境になりそうだったので。

「告白できないタイプ？」

パソコンに目線を戻してそう聞くと。

「そんなもんです。あ、実花さん返品処理もいいですか？」
向こうも仕事の話に切り替えた。

なんだか深く聞くのがためらわれたのでほっとした。

私の心の隙間に入り込んでいる店長の存在に

私はなんとなく気付いていたけれど、
それを認めるわけにはいかなかった。

10月に入った頃、聡に転勤の話が持ち上がった。

「えええ!!!福岡????」

あまりに遠い地名に思わず叫び声に近い声が出た。

「ああ、福岡。北九州だけれど。来年になってから。」

自慢じゃないけれど、私は生粋の東京生まれの東京育ち。

両親だって東京出身。関東を離れるなんて旅行だけ。

「新営業所の立ち上げから関わる事になって、まだ準備室の状態なんだ。」

聡だって関東から離れた事がないはず。

「来週、建設予定地の視察で出張なんだ。1週間。」

「拒否権はないの？」

「ない。行くか辞めるか、どっちか。」

そこでふと気付いた。

もしかしてこれは、左遷なの？

まだ、あの問題が尾を引いているのかもしれない。

会社で、そしてもちろん私の中で。

今もあのメールは消せずにあった。

聡は私の方を見ずに言った

「実花が行くか行かないかは、まだ返事なくていいよ。

ゆっくり決めればいい。」

胸の奥を的で射抜かれた気持ちだった。

私の気持ちが聞こえたのかもしれない。

「この話ははっきり決まってるからだ。」

そう言って聡はテレビの方に視線をやった。

巧の入学もあるのに、私の仕事もあるのに。

拒否権がないなんて、そんなのあんまりだと思った。

でも、あの事を忘れて再スタートを切るのには

いいのかもしれない、そう思うけれど。

そして私は、結局九州へついてゆく事が出来なかった。

聡は、何も言わなかった。

「数年で戻れると思うから。」

そう一言だけ残して。2月に福岡に本当に行ってしまった。

私と巧の母子暮らしが始まり、巧は入学し、

そして心にわだかまりを残したまま、私たちは9か月を過ごしたのだ。

休日出勤は出来なくなった。

店長に夫の単身赴任を告げた時

「実花さん、本当について行かなくていいんですか？」

そう言われた。

「私は、九州では暮らせないと思う。」

それだけ答えた。私たちの間の微妙な溝は

誰にも知らせなくていいことだから。

聡は九州で、会社が借りてくれた部屋に住み

新しい生活をスタートさせた。

私は一度も行かなかった。

結構立地条件が良く、コンビニもすぐ近くにあって

暮らしやすいとは聞いた。

空港で別れた時、巧は泣いた。

罪悪感でつぶれそうな気持を必死に抑えた。

夏は忙しくて帰れなかった聡が正月に帰って来る。
それだけで胸の中がざわめく。

episode 13

12月に入ったすぐの土曜日、新婚の奈央の家に遊びに行った。

もちろん巧も一緒に。

奈央の住んでいた部屋の上の階の部屋は前の部屋よりほんのちよつと広くて

でも、どこことなく前の部屋の雰囲気も残ってた。

「今日、圭司さんは？」

キッチンの奈央に話しかけると

「土曜日は、まず休みってことがないの。」

圭司もゆっくりして行っただけで。

奈央の入れたコーヒート、私の持ってきたケーキでまずは10時のお茶を飲んだ。

食べ終わると、巧は広いベランダに出て外を見ると席を外した。

その途端、2人の会話が盛り上がった。

「すごい早い展開だったよね、奈央。」

あーんなにさ、ドロドロ思ってたじゃない？」

そう言うと、奈央はフフフと笑った。

「まあね、もう会いたくない人この世でNO.1だったと思うけれど。」

「本社に行ったときとか、こそこそ逃げたとか言ってたさこっちに戻って来た時も、すごい泣き顔の入ったメールして来ててさ、

で、あつという間に元の鞆ですもの、奈央ったらさ。」
わざとらしく皮肉めいて言うと、奈央も笑っていた。

「そう言えば、単身赴任って期限あるの？

福岡だっけ？ 聡さん」

「ああ、北九州。小倉よ。」

「遠いね、九州とか。」

「年末は帰ってくるみたい。夏は忙しくて戻れなかったから。」

「ね、実花。まだ引っかかっているの？ 去年の事。」

悪友はこういうところストレートだ。

まあそう言うところが良いのだけれど。

「まあ、隙があったとはいえ聡は悪くなかったし、

でもさ、私もすごい疑っちゃって。」

「仕方がなくない？ あんな事されたら私だって不安定になるよ。

でも、これにこだわって、実花たちがおかしくなったら、

それこそ向こうの思うつぼだし。」

「でも、九州に全部捨てて行く勇気もないんだ。」

そう言う二人しばらく黙りこんだ。

12月とはいえ、天気が良くて部屋の中は結構暖かい。

ベランダで空を眺めている巧も、遠くまで見るのに夢中のようだ。

「ねえ、奈央。奈央はどうやって乗り越えた訳？」

「何を？」

「だってずっと勝手に置いて行ったこと

どこか憎んでたわけでしょ？」

だから5年隠れたりしてたんだし。

5年の思いをどう処理しちゃったの？」

奈央は持ってたカップをゆっくり置いた。

うーんとしばらく考えて話し始めた。

「なんだかんだ言って、忘れられなかったんだよね、多分。

憎いって思い続けるってパワーのいる事よ、

人を憎いと思うって疲れちゃうじゃない？」

町で会ったら嫌だなとかずっと考えてるじゃない？

余計なパワーを使ってまで、憎いつて思うって

相手への思いが強いつてことかなって思った。

本当なら5年もあったら他に行っても良かった事だね。」

私さえ気持ち切り替えられたらさ。」

淡々と話す奈央の顔をまじまじと見つめた。

奈央はなんだかんだ言いながら5年間誰とも付き合ってたなかった。

いつも、前の男が良すぎたのよね、って冷やかして

その度、冗談じゃないって切れてたっけ。

「結局、私は圭司の事が好きだったのよ。」

好きだけど報われないから、多分憎むことでごまかしてたのよ。」

そうにつこり笑う奈央は、以前より格段に綺麗になっていた。

幸せなんだろうなあ、きつと。

好きだから憎いか、そっか。

「・・・・・・ごちそうさん・・・・」

「ちよっと！、なによそれ人は真剣に答えたのに。」

「結局、ノロケじゃん、美味しかったよ。」

「もう、実花ったら。」

二人で大笑いした。こんな毒のある掛け合いで本音を語れるってなかなか他にいない。

私はいつから聡に本音が言えなくなったのかしら。

「なんかさ、あの時さ、あまりのメールのインパクトに、

聡に対する怒りまで湧いてこなかったのね、

事が落ち着いてからさ、表面を繕うことばかりしていて

本題に触れるのが怖くて逃げてたら

いつの間にか腫れ物に触るような生活になって

どうしたらいいかわからないまま単身赴任になっちゃって。」

「じゃ、今は怒ってる訳？」

奈央に言われてドキッとした。

あれ、私のもやもやの原因はなんだっけ？

episode 14

何にもやもやしてたんだっけ？

聡を信じなかった自分にだとか、そんな事言いながらさ、いい子ぶってるような気もする。

「そう言えば、私、全然聡を責めたりとかしてないんだ、なんだかんだ言って朝までその人と一緒にいた事とか本気でムカついてるのに言えなくてさ。」

その後も何も言わないのを聞けなくて

急に信じて黙っててくれてありがとうとか言われて、

余計に何も言えなくてさ。

信じて黙ってたんじゃないかって、知るのが怖くて黙ってた訳よ、きつと。」

ああ、こうして話すと、なんだか絡まってた糸が解ける。

本音の自分が見えて来た。

「実花はまだ、この件について完全燃烧してないわけだ。」

「そうかもしれない・・・」

「お互い遠慮してるんじゃない？

実花がその壁をぶち壊しちゃえば？

子供に見せたくないなら家で預かるけれど。」

そう言っただけ奈央は意地悪い笑いを浮かべた。

「殴ってるところ見せちゃまずいもんね。」

「1発で止めときなさいよ、DVになっちゃう。」

「あ、単身赴任でいないんだった。殴れない。」

2人で涙が出るほど笑った。

お昼は出かけてランチして、ぶらぶら買い物して奈央と別れた。

人込みを、少し先に巧が歩く。
時々こつちを振り返り、あっち？こっち？と聞きながら。

結局好きだから憎い、か。

この言葉がすぐく引かかる。

「好きなのかな、」

ついぼそつと口をに出してしまった。

食品コーナーで野菜を選んでいた時だった。

「ん、ママ何が好きだった？」

慌てて、握っていた大根を置いた。

「あ、大根よ大根。巧好きだったかなって。」

「おでんならね、好きだけれど。」

そう言っ、肉売り場に歩いて行った。

私は大根の前を離れて、巧の後を追った。

結局は素直になれってことなのかしら。

好きなものは好きだって。そんな簡単そうな話だけれど、

そこがうまくいかないのが、大人の不思議かも。

12月に入っ、忘年会が行われた。

社員とパートにバイトを合わせて8人ほど。

うちの店だけの忘年会。営業所主催のは再来週にあるようだった。

12月とはいえ、そんなに寒さも感じず、集合場所の居酒屋に向かった。

最近、繁華街に出る事がなかった、集合場所が良く分からない。
早目に家を出たのに、お店が見つからない。

集合時間まであと5分。

電信柱の住所表示は確かに近くの住所を示しているのに、
どうやら私は、迷っているようだ、うん。

その時、携帯が鳴った。

画面には店長の名前が出ている。

ホッとして、電話に出た。

「もしもし。」

店長の明るい声に、後ろでいろんな人の話し声が混じる。

「実花さん、あと実花さんだけよ。今どこですか？」

「うーん、確実に近くにいますんだけど。」

「もしかして迷子？」

「そうとも言うかも。」

ぶーっと大きく噴出しているのが聞こえた。

「失礼ね、夜の街には滅多に出ないのよ。」

そう言うと、

「目の前に何があります？」

周りを見渡すと、1軒先にたばこの自販機、目の前にラーメン屋があった。

「やきとりの赤ちようちにラーメンいわいと、たばこの販売機。」
そう言うと、

「わかりました、そこで待ってて。」

そう言って電話は切れた。

2分程で、小さな路地から店長が出て来た。

走ってきたらしく、息が上がっている。

「実花さん、隣の通りなんですよ。」

「え？本当に？」

「この路地から入れるから行きましょう。」

そう言って肩に手を置いて、小さい路地に誘導された。

なんだか触れられてドキッとしたけれど

悟られないように、なんともない振りをした。

人が並んで歩くのも少し狭い小さな路地。

15メートルほどで向こうの路地に出るようだった。

でも、電気少なく少し薄暗い。

「待ってたんですよ。」

そう言う明るい店長の声に

「早く乾杯したかったんでしょ。」

そう言うのと、店長は急に真面目な声で、

「実花さんと飲めるなんて滅多にないから、楽しみです。」

そう言っつて、ふふつと笑うと、

「さ、早く行こう。」

そう言っつて肩に添えた手に力を込めて来た。

episode 15

久しぶりの飲み会はやっぱり楽しい。

巧はお泊まりだし、遅くまでゆっくりできるし、
なにより、心のもやもやも忘れられた。

ジョッキで飲むビールは味が違う。

酒屋で売ってる缶のカクテルと何かが違う。

解放感かな、なんかいつももある重責が外れるせいかな。
気晴らしってやっぱりたまには必要なんだ。

みんな昼間と違う顔がある。

こういう時じゃないと出来ない会話もある。

そんないつもの仲間との新鮮な会話に

気持ち弾んでいた。

2時間の飲み会はあっという間に終わり、

2次会に移動して、また飲んだ。

時計が午前0時を回った頃には徐々に人は減って

気がつけば、酔い潰れた若い社員の女の子をどうするべきか

店長と二人で悩む羽目になっていた。

仕方がないので、二人で向かい合って飲みながらだけれど、彼女が
起きるのを待っていた。

「実花さんは大丈夫ですか？家。」

「うん、今日はね、帰っても誰もいないから。」

「息子さんは？」

「友達の家にお泊まりに行ってるのよ。」

そう言うと、店長は嬉しそうに、

「じゃ、まあ、飲みましょう。」

にっこり笑って、メニューを再度開いた。

「もうあんまり飲めないよ。だからグラスワインにする。」

「飲めるんじゃない・・・」

酔ってるせいか、何故か2人で大笑いした。

何がおかしいのか良くわかんないけれど

すごい楽しい、楽しいんだ。

「ねえ実花さん、なんかすごい悩んでるでしょ？」

「そう見える？」

素直に切り返すと店長は

「うん、なんか旦那さんが单身になる前からおかしかった。」

「いろいろあんのよ。」

つい目線を外した。生傷は触らないほうがいい。

「結構深刻？俺に話してみない？」

その言葉に驚いて、店長の顔を見ると、酔ってるわりに真面目な顔だった。

なんだかその目線に、ぐらっときてしまった。

もう何もかも預けてしまいたいそんな衝動に駆られた。

私の方は酔ってた。きっと店長も酔ってると思う。

酔ってなかったらこんな話はしようと思わない。

でも、本当に真摯な顔でそう言われると

胸の奥のつかえたものをちょっと吐き出したくなってしまった。

つい昨年からの話を店長に打ち明けてしまった。

目もとからついこぼれる涙をごまかすのは大変だった。

深刻そうでなく、明るく話してみたけれど

心の底のチクチクしたものは忘れられない。

「なんだか、出来てしまった溝を埋められなくて

転勤の話が出て、ついに行くって言えなくて。

ただでさえ九州なんて旅行でしか行ったことないし、

この状態で周りに友達も知り合いもいなくなったら、

そう思うとやっていけないって思ったのよね。」
話をそこで終えると、店長は黙ったままだった。

「ごめんね、こんな楽しい日にこんな話して。」

「いえ、こんな時でないと聞けないから。」

旦那さんって頼られる人なんですね。

俺とは大違いだ。大人の男なんでしょうね。」

「昔から、周りに人が集まる人で

私は周りで見ていただけだったの。

なのに、なんでか私と結婚したのよ。

その辺が謎よ、周りに綺麗な子たちいっぱいいたのに。」

そう言うと、店長はすかさず、

「実花さんは綺麗ですよ。」

実花さんは自己評価辛すぎ。」

そう面と向かって言われるとびっくりだ

「あ、ありがとう。何も出さないわよ。」

そう言うと、にっこり店長は笑った。

「店長こそ、彼女いない悩みとかない？聞くよ？」

そう言うと、

「いいの、俺はかなわぬ恋をしているんだから。」

「え？かなわぬ恋？」

「そうなんですよ、きつと叶わないからいいんです。」

そう言って私を見た。

本当はさ、私もバカじゃないから、店長の言いたい事はわかってる。

私も、こういうあやふやな関係を楽しんでいるのかも知れない。

壊したくない、そんな身勝手な気持ち。

ずるい、私はずるいな。

そんなの本当はわかっている。

でも、今、店長の存在が、私に取って大きくなってきている。

これ以上は、踏み込んだらいけない。

たとえば、たとえば私が、聡とこのまま別れても、
店長を巻き込んだら、私は一生救われないし、店長をダメにしてしま
う。

このまま、気の合う仲間でないといけない。

私は、明るく答えた。

「いつか、店長にピッタリ合う、運命の人が現れるよ。」

店長は寂しそうに笑った。

そうよ、お似合いの若い女の子が現れる。

episode 16

午前2時を回ろうとした頃、社員の女の子が目を覚ました。
「あれ？私もしかして寝てましたか？」

店長と2人で大笑いすると、目覚めたばかりの彼女は、
「みんなどこ行ったんですかね？」

と寝ぼけている。のんきなものだど店長と大笑いした。

「え？もうこんな時間ですか??？」

帰らなきゃ、と慌てているので、

私たちは会計して店を出た。

社員の子をタクシーに乗せ、次のタクシーを待った。

週末と忘年会とで込み合っているらしく

20分くらい待って欲しいと言われていた。

車の流れも少なく、店の脇の街灯の下で

店長とタクシーを待った。

「あー今日は良く飲んだねえ店長。

明日の朝、起きられるの？私休みだから関係ないし。」

人通りは少なくはなっているけれど

街灯や店のネオンで町は明るいなあとぼんやり思う。

家の中にいたら、つい子供と寝てしまって

こんなの見る事はないんだよね。

まだまだ起きていたい気持ちもあるけれど、店長は仕事だし、

そうわざと意地悪く言くと、店長は頭を傾げて

「俺、明日は、早出なんだよね。心配。」

そう言って店長はため息をついた。

わざとらしく大笑いしたら、足下がふらついた

「あっ・・・痛い~~~~~。」

転んで尻もちをついてしまった。

酔っているとはいえ、恥ずかしい。

店長は笑いながらも、手を差し出してくれた。

「実花さん、飲みすぎだし。ほら。」

差し出された右手に、反射的に手を出したのは
きつと酔っているからだ。

ぐっと手を引かれて立ち上がらせてくれた。

「ありがと・・・」

う、を言う前に、店長に抱きしめられた。

えっと、これはどうしたらよいのかしら。

回らない頭で考えてたが何も浮かばない。

「ごめん、実花さん。今だけ抱きしめさせて。」

その言葉に、どうしようと思った。

考えられない頭の中で、何もかもが飛んで

私たちは、抱き合っていた。

翌朝、巧が家に帰ってきた音で目覚めた。

とんでもなく頭が痛かった。

「ママ、寝てていいよ。朝ごはん食べたから。」

美穂おぼちゃんがね、ママは絶対二日酔いだって言ってたよ。」

美穂め・・・、そう思いながらも、

その巧の言葉に甘えて、布団にくるまった。

あのまま、タクシーが来るのがもう少し遅かったら

私たちはどうなってただろう。

タクシーの来た気配に我に返って、

言葉もそこそこに家に帰った。

私ってば、最低。

流されかねなかった。

ただ、自分自身で気付かないほどに誰かに慰めて欲しかったんだとは気付いた。こんな事で気付くなんて、大人失格かもね。しかし、どうしたものだろう。明日から。

答えは見つからない。

今日の夜は、今度は美穂の家の子供が泊りに来るので昼過ぎに買い物に出た。

晩御飯の買い物をして、家に帰るとメールが入ってたのに気づいた

携帯を開いたら、店長からだった。

俺は本気でした。

後悔してません、でも、

実花さんは忘れてくれても構いません。

切ない心に風が吹いてた。

episode 17

いくつになっても恋愛上手になるわけでもない。
いろんな事にどうしていいのかわかんないのは
いくつになっても同じこと。

月曜日の出勤にはもうどうにでもなれって気分になってた
あんまり細かいこと考えるの得意じゃないのよね。

単身赴任中の聡からはこの週末は連絡がなかった。

携帯のボタンを押せば繋がるはずなのに、
繋げようとしなかった。

それはお互いにそうなんだろうけれど。

離れれば離れるほど、どうしていいのかわからなくなってきた。

素直に手を差し出す事も出来なくなってきた。

日曜日の夜に、メールの作成画面を何度も開いたけれど

打ちかけのメールはすべて削除した。

深いため息と、重い心だけが残った。

でも、その寂しさを店長に押し付けちゃ絶対だめなんだ。

絶対だめなんだから、そう自分に言い聞かせた。

月曜日の出勤は気が重かったけれど

ここで気にしたら、店長とのせっかく築いた友情までがダメになる。

バックルームに入る時、背筋を伸ばした。

ドアを開け

「おはようございます。」

そう、いつものように、いつものように入った。

今日のシフトの相手が出勤していた。

「実花さん、おはようございます。」

「おはよう、今日は朝は2人かな？」

周りをちらりと見ても他に人はいない。

「そうみたいです。」

なんだか気が抜けた、最初が肝心と思ってたのに。

気合が空回りしてしまった。

月曜日のショッピングモールは、客も少なめ

店内の服のたたみ直しをしていたら

店内のクリスマスのディスプレイがちょっと壊れているのに気付いた。

子供服店だし、お客の子供さんが壊すのは想定内のこと。

ちよっとゆがんだ飾りとトップスターのバランスを
じっくり見ながら直していく。

この際だからと店内の飾りも見てみると

端の方がいじられたりしている。

ちよっと後ろに下がって全体を見ようとすると

誰かにぶつかった。

「すみません。」

そう言って慌てて振り返ると。

「ダメですよ実花さん、ちゃんと確認してから下がって下さいよ。」

店長が立っていた。

いきなり

だからつい、いつも通りに、すつと言葉がでた。

「すみません、どこかケガしたなら救急車手配しますけど。」

ちよっと嫌みっぽく言うのと、いつものように店長は笑う。

このまま何もなかった事にしちゃおう。

それが一番いいと思うんだけれど。

お客さんが入ってきて、私は店長のそばを離れた。

午後のシフトに、飲み会でつぶれた社員のアイちゃんが入ってきた。

「おはようございます、実花さんこの間はすみませんでした。」

そう言いながらペコペコ頭を下げるアイちゃんに

「なかなか可愛い寝顔だったよ。」

わざとそう言って返した。

「もう恥ずかしいなあ、私寝てる間、店長とずっと飲んでたんですよ？」

全然わかんなかった、爆睡ですよね私。」

アイちゃんはそう言いながら顔を隠す。

「せっかくの社内の独身男性の前で、私よだれとか垂らしてませんでしたか？」

ああ、恥ずかしいなあ。なんか言ってませんでしたか？店長。」
ずきつと心に何か刺さった。

そうなんだよね、こういう独身の若い子との
未来が店長にはあるんだからさ。

アイちゃんの肩に手を回して囁いた

「寝顔可愛いって言ってたよ。」

二人でそう話してたんだから嘘じゃないもん。

仕事を終えてスーパーに立ち寄った。

今日の晩御飯はなににしよう。

巧の好きなハンバーグにしようかな？

聡もハンバーグ好きなんだよね。

時々、ちゃんとご飯食べてるのかとか、掃除はしているのかとか
気になるけれど、聡は大学時代も一人暮らしをしていたし

きっと上手くやっているとと思うけれど。

ちゃんとやってる？とか、病氣していない？とか

ただ、ちよつと電話して聞けばいいのに。

それも、なんだか気が重くて出来ないなんて、
私たちは本当にもうダメなのかも。

でも、私たちもうダメだよ、なんて確認するのも怖くて出来ない。
なんだかんだ言いながら、聡と別れたくない自分に気づいている
から。

気付いているのに何もできない。

episode 18

お風呂から上がると、巧が聡に電話をしていた。聡の仕事は結構遅いので、電話は夜9時を回ってからと言っている。

9時になった途端に電話をしたのだろう。

リビングから楽しそうな巧の声が聞こえる。

その声を聞きながら静かにキッチンに入った。

冷蔵庫から、ウーロン茶を出してコップに半分入れ、一気に飲んだ。

「今日は唐揚げだったよ。パパ何食べた？」

ぐっとお茶が喉でつかえた。

良かった、ハンバーグ止めといて。なんとなくだけだね。

そのままなんとなくキッチンで巧の声を聞いていた。

「ママ、お風呂、うん、長いもんねいつも。」

・・・・・・・・悪かったわね。

なんだか出て行きにくくなっちゃった。

「いつ帰って来る？冬休み入ったらすぐ、じいちゃんと約束してるから」

僕だけ泊って来るから、ママ仕事だから。うん。

じゃ、じいちゃんちにパパが迎えに来て。

28日ね、今日は15日だよ、うん。わかった。

じゃ、またね。」

電話を切って、巧はテレビを付けた。

お笑い芸人の騒がしい番組の音がリビングに響く。

今、お風呂から出たかのようにリビングに向かった。

「今、何時？もう10時になるじゃない？」

宿題終わってるの？」

そう巧に聞くと、巧は

「もう、ママはお風呂長いなあ、
パパと電話終わっちゃったよ。」

と、聞いた事には答えず、不満そうにそう言った。

「へえ、電話かけたの？ママの携帯から？」

「うん、28日にパパがじいちゃんちに迎えに来てくれるから
そこまでじいちゃんの所に泊るから。」

聡の実家は静岡の浜松にある。

うちの車は、聡が福岡に持って行ってしまったので

義父が終業式のある22日に車で迎えに来てくれるのだ。

夏休みもそうして浜松に行き、1週間後に帰りも送ってもらった。
なので、福岡からの帰りに連れてきてもらおうと
おじいちゃんの手を煩わせずに済む。

「そうね、パパも疲れるだろうから、2人でもう一日泊ったら？」

「そうだね。どっか連れて行ってもらおうかな。あ、俺トイレ！」

そう言うど巧は、トイレに向かって走り出した。

「家の中は走らないのよ。」

その後ろ姿に言っではみたが、きつと聞こえてないだろう。

なんだか眠れずにいた。

寢室のテレビを付けて、画面をぼんやり見ていた。

その後、メールひとつ来るわけでもないし、私もしなかったし。
テレビから大げさな笑い声が聞こえる。

耳触りで、思わずスイッチを切った。

真っ暗な部屋。こんな夜が一番辛い。

自分が一人だと思ひ知らされる。

聡と他愛のない話をしたのはいつが最後なんだろう。

携帯のメールの着信音がした。

音は小さくしてあったけれど、飛び起きてしまうくらい驚いた。
つい最近機種変更したら、携帯を開かないと誰からのメールか着信

かも

分からない機種になってしまったので、携帯を開いて確認しないといけなくなった。

ベッドサイドのテーブルに置いていた携帯を手にとった。
聡からかもしれない、そう思い深呼吸して携帯を開くと。

店長からのメールだった。

「この間はごめん、でも、俺は実花さんが
嬉しそうに笑う姿が一番見たいから。
いつものように笑ってくれて良かった。」

明日は会議で店に出るのは午後になります。
そこまで対応よろしく。」

なんだかほっとした。

これで良かったんだよね、いつもどおりに何もなかったように。
それが一番いいよね。

返信しようとする、突然携帯が着信を告げる。

思わずびっくりして取り落としてしまい慌てて拾い上げた。
画面を見て、ドキッとした。

聡だ。聡の名前が液晶に出ている。

慌ててボタンを押した。

「もしもし、聡？」

電話の向こうから懐かしいくらい久しぶりの声がした。

「実花？ごめん、寝てたかな。」

「ううん、寝てなかった。」

そう言うと、一瞬間が開いた。この間がなんだか居心地悪いのだ。

「今日、巧と話したんだけど、浜松に迎えに行く話。」

「あ、ああ、巧から聞いたけれど。お風呂入ってたから。」

「ああ、相変わらず長いなあ、何回洗えばそんなに時間かかるんだか。」

それはいいけれどさ、俺も浜松泊ってから帰るつもりだから。」

「あ、巧にもそう言ったのよ、福岡から運転して疲れてるだろうからパパと泊ってから帰りなさいねって。」

「ああ、もう夕方になるはずだから、そうするから。」

実花、仕事は何日までだ？うまく行ってる？

平日しか仕事でなくなってる困ってないか？」

なんだか仕事の話なのにドキッとした。

別に店長とは何でもないからドキドキしなくていいのに

今、店長からメールが来たばかりだし、ちょっと見透かされた気分。

「ん？冬休みのバイトさんがいるから、30日から4日まで休む。」

日曜日も学生さんのバイトが入ってくれてるからなんとかなくなる。」

「そっか、俺は今回は6日に帰ればいいところまで休み。」

夏、休んでないから今回は長いんだ。」

ああ、そうだったなあ。夏は帰ってきてないから、もう長い事顔も見えていない。

「お疲れ様。ちゃんと食べてる？」

自分でもあれ？って思うくらいすんなり言葉が出た。

「んー、でも、5キロ痩せたかな。ちよっと腹が引っ込んだ。」

「それは健康的に？」

「健康的にもいいんじゃないかねえの？」

なんだかまた沈黙。どう言葉を返していいんだか。

離れているところも溝は深くなるものなんだ。

実感させられた。痛いくらいに。

episode 19

あつと言う間に学校は終業式を迎え

その日はきつと朝早くから浜松を出て来たのだろう、

夫の両親が昼前には家にやってきた。

滅多に会えないたった一人の孫に会いたくて、

ウキウキしながら来たのがよくわかる。

聡の性格と同じく、面倒見の良い、明るいさばけた義両親。

こんな両親の下で育った聡が羨ましいと思っていた。

「実花ちゃん、一人でいつも大変でしょう？」

聡も転勤なんかになっちゃったし、早く戻れるといいんだけどね。

なんなら転職して浜松にって言っただけけど、

まあ、あの子の性格上、今更戻っては来ないんでしょう。」

嫌味には聞こえない、義理母はそんな愚痴をこぼしてはいたけれど。

途中でお昼ご飯にとお弁当を買ってきてくれて、

学校から帰った巧と4人でご飯を食べ、

午後1時には3人で、浜松に出発した。

巧も嬉しそうに車に乗り込んだ。

「ママ、お土産買ってくるね！」

そう言っ、巧は手を振った。

私はそこから仕事に出る準備に入った。

今日は遅番と変わってもらったのだ。

義両親がわざわざ来てくれるし、出迎えない訳にもいかないし。

だから珍しく遅番で出勤する事になった。

閉店の9時まで残らないといけない。

まあ、巧がいないのでその辺は問題ないけれどね。

初売りの準備とかで、明日からも少し長めに仕事を入れた。車を見送って戻った部屋は、がらんとしていて、なんだか寂しいと思ってしまった。

出勤して、今年最後の発注にかかった。

今日を逃すと、今年中には間に合わない。

在庫とにらめっこして、他の備品の在庫も確認して。

こういう風に任されるのは、すごく楽しい。

パートとはいえ、自分の場所があるって気分になる。

発注の予定を一覧にして、店長の決済を貰おうと、

店長の姿を探した。バックを出て店内へ移動した。

ショッピングセンター内は、クリスマス一色。

巧には年末に渡す約束をしているので、まだ選んでいない。

欲しいものは大体知ってはいるけれど、うちにはサンタさん神話はない。

パパと3人で買いに行く楽しみにしているのだ。

巧の気持ちを考えると、今の状況は非常に申し訳ない。

店内でレジに入っていた店長を捕まえた。

「チェックお願いします。」

そう言って決済板ごと書類を渡し、レジを交代した。

「では、包装が終わりましたらお呼びしますので、

それまで店内ご覧になってお待ちください。」

そう言ってラッピングにかかった。

3歳位の女の子向けのサイズのかわいいワンピース。

発注の時からかわいいなあと思っていたワンピースだ。

うちには縁のなかった、可愛いワンピース。

ピンクの箱に詰め、クリスマスの包装紙で包む。

横で、発注予定表を見ていた店長が、

「これ、印鑑押しましたから、置いておきますよ。」

そう言って後ろの台に置いた。

「ありがとうございます。」

包装中の箱から目を離さずに返事をした。

「今日、実花さん最後までですよね。」

「はい、ラストまでいます。」

リボンの結び具合を決めていたので、気持ち半分で返事をしていた。

「終わったらご飯食べに行きませんか。」

「いいですねー・・・じゃなくて！」

思わず顔を上げて店長を見たら、ニコニコしながら

「いいって言いましたよね、じゃ。」

そう言って次のお客さんの接待に行ってしまった。

いいよとは言っていないけれど・・・

ダメとも言えない自分に自己嫌悪・・・

episode 20

結局、大手チェーンの大衆居酒屋に行った。

店内はざわざわと賑やかで

年末の忘年会シーズンだけあって、カウンターしか開いてない。

並んでカウンターの席に座った。

子供がいないからってこんななんだかいけないかなって思うけれど
カウンターだし、2人つきりじゃないし、まあいいよね。

そう自分に言い聞かせていた。

生ビールが運ばれてきて、店長はジョッキを掲げた

「まず、乾杯しましょ。今日もお疲れさまでした。」

「お疲れさまでした・・・」

かちんとジョッキを合わせた。

うっくんやっぱり、一口目のビールってって最高。

そう思いながらジョッキを置くと、店長は優しい笑みで私を見る。

「この間も思ってたんですけれど、実花さん乾杯の時の顔しますね。」

「悪い??」

「いや、いい顔なんですよ、本当に。」

そうニコニコ笑う。からかわれてるのかしら。

「ま、食べましょ。ほら。」

もうがつつ食べてやる、そう決意して割り箸を割った。

揚げだし豆腐食べて、串焼き食べて唐揚げ食べてサラダ食べて、

ジョッキに2杯飲み干した頃には、食欲は収まった。

年末のシフトの話とか、初売りの話とか

そんな話を選んでしていたけれど、ネタも尽きて来た。

でも酔っているせいか、何か喋りたくて仕方がない。
酔ってるせいだ、ついぼろっと口から出てしまった。

「本当に彼女いないの？」

店長はニヤリと笑った。

「やっといつもの実花さんになった。」

「いつものって何よ。」

「いえ、別に。」

そう言いながらもニコニコしながらビールを飲んだ。

「俺はね、実花さんが幸せでいて欲しいんですよ。

生き生きした実花さんの笑顔が好きなんです。

だから悩んでほしくないんですよ。」

そんなこと言われても困ってしまう。

どう受け取っていいんだか悩んでしまうじゃない。

「安心してよ、俺は実花さんに、旦那さんより俺を取ってって

言わないから。」

そんな苦しくなるような事は言わない。

ただ、実花さんといると楽しいから。

だから飲もう、もう一杯。」

「そんなに価値のある女でもないわよ、私。」

「何言ってるんですか、人間の価値は

物差しなんかないですよ、

俺にとって実花さんの価値はうなぎ登り。」

酔っているのか知れないけれど、無邪気に言われて

恥ずかしいやらむずがゆいやら。

なんだか自分がすごく可愛い女になってる錯覚を起こす。

店長はどんどん続ける。

「旦那さんの事、今でも好きなんですよ？」

だから苦しいんですよ。」

あれ、そこでなんでこの話なの？

「なんか今言われてた事と、質問がかみ合わない気もするわ。」

「悔しくない訳じゃないですよ、でも

今の実花さんは、これを解決しないと進めないみたいだから。」
核心を突かれて、ドキッとした

「なんか付き合ってた頃よりよそよしくなっちゃって。
相手も自分もね、子供もいるのに馬鹿みたいでしょ？」

「なんで実花さんはよそよしくするの？」

.....

「なんでだろう。」

本当になんてかわかんない。

「また、私にとって聡は、憧れの遠くから見る人に
戻っちゃったのかなあ。」

あの頃みたいな気分。」

そう言うと、しばらくお互い黙ったままになった
しばらくして店長が切り出した。

「悔しいなあ。」

「何が？」

「いつまでも実花さんに恋心持たせてるなんて
すごいのかも、悔しすぎる。」

「恋心なんかじゃないよ、多分。」

そう否定してみたものの、きゅっと心が締まった。

「実花さん、俺の付けこむ隙はないですか？」

並んで座っているせいか、首をかしげて店長はそう言った。

周りのざわめきが一瞬止まったように感じたのは

本当に気のせいのはずなんだけれど、

なんだか、そこで世界が一瞬止まった。

胸の奥がざわっとざわめいた。

episode 21

突然切りこまれて、一瞬ひるんだ。

でも、ここはやはり、一度話し合うべきなのだ。

「ダメじゃん、店長。それ言っちゃ。」

そう言う店長はえ？と言う顔になる。

お酒を飲んでるせいか、素直になれる気がした。

「正直店長の存在に救われてると思う。」

いつも明るくて、気遣ってくれて、本当にありがたいって思う。

揺らがないかって、正直はつきり違うとも言えない。

でもね、私多分、今も旦那の事大好きなんだと思う。」

言いだしたらなんだか止まらない。

「店長、店長にはすごくいいところがいっぱいある。」

彼女がいない彼女がいないって言うけれど

店長にはきつと運命の人は絶対いる。

その彼女が羨ましいと思うくらい店長はいいところがいっぱいあるの。

だから幸せになって欲しい。

いつかきつと、それを見届けられるかわかんないけれど

そのままの店長でいて欲しい。」

思わず一気にまくしたてると

店長はニヤッと笑った。だから私もにつこり笑えた。

「なんか落ち込むべき状況なのに、落ち込めないな。」

やっぱ実花さん最高。」

「ただ、店長の事好きなだけよ。」

こんな人妻に落ちて欲しくないの。」

「大丈夫、理解できましたから。」

そう言う店長に、わざと

「良かった、泣かれちゃったらどうしようって思っちゃった。」

そう言うと、店長は笑い出した。

つられて大きな声で笑った。

私たちは友達でいられるよね、きっと。

終電に間に合いそうなので、2人で駅まで歩いた。

今年の冬はいつもよりとても寒い。

「寒いねえ、店長。酔いが覚めちゃう。」

「明日から雪になるって。年末年始は雪って言うし

地球温暖化って言いながら、冬は寒いって卑怯だね。」

そんな他愛ない事を話していたのだけれど、ふと思った。

「店長、あのね、聡と話し合おうと思う。」

出来れば、一緒に暮らせるように話し合いたいと思う。」

店長は立ち止まった。私が一歩前に出る形になったので後ろを振り返った。

「一緒に暮らせるかまだわかんないけれど。」

そう言うと、店長は言った。

「実花さんの幸せを願ってるから。いつも。」

そう一言答えて、店長は右手を差し出した。

私たちは握手をした。

「頑張って告白してください。実花さん。」

でも、俺は実花さんのこと好きな気持ちは変わらないですよ。」
胸がきゅっと締め付けられる。

こんな私にそんな気持ちは抱くのはもったいないのに
でも、今はその言葉に甘えていたい。

きっといつか、その気持ちは他の人に向くんだから。

風もなく、空にはオリオン座が見える。

明るい都会の夜にも負けずに、星が光って見える。

店長にもっとすがりたい気持ちはあったけれど、

それは胸の奥にしまって、握った手をゆっくり離した。

「また、明日。お店で。」

episode 22

今日は12月28日

年末とはいえ、いつも通りに仕事に出ていると

年の瀬の気配をあまり感じない。

食品売り場とかにいれば、売り場はおせちや正月用品や

そんなもので感じるのかもしれないなあ。

そんな事を思いながら、職場への道を歩いていた。

今日、聡は巧のいる浜松に向かっている。

正しくは昨夜出発したようだ。

11時ごろ、今から出るとメールが入った。

強い寒波で雪の予報が出ている。

路面凍結とか、車の運転にいまいち自信のない私にはちょっと怖く感じる。

無理しないでゆっくり進むよう、メールを返した。

今日の勤務も、私は一日フルタイムで仕事を入れている。

忙しい正月に休む申し訳なさで、出れる時は精いっぱい出ようと思いい出勤しているのだけれど、それでも

正月の福袋の準備などでバタバタしている。

アルバイトにも初売りの打ち合わせをしないといけない。

どの辺まで聡の車が進んだのかとか、気にはなっていたけれど

電話やメールを送る余裕すらなかった。

聡は、夜中は3時間ほど仮眠を取ったようだった。

朝6時半に、今、岡山と携帯に電話が入った。

ちょっと眠って起きたところらしく、声が多少枯れてはいたけれどなんだか楽しそうに話してくれた。

まだ暗いんだけど、寝心地悪いから目が覚めた

もう早く出発して早く着きたいとこぼした。

そんな聡の話を聞いていると、昔のように話せた気がした。

今回家に帰ってきたら

聡と話をしよう。じつくりと今の気持ちを話すんだ。

そう思うとなんだかドキドキした。

離れて暮らすのは嫌だと言ってみようか。

でも、拒まれたらどうしたらいいんだろう。

聡だって離れている間に、誰か気になる人が

いたりしたらどうなるだろう。そんなマイナスな思考に
囚われそうになる自分を心で叱咤した。

慌ただしく仕事をして、やっと2時から昼休憩を取った時に
携帯のメールを開くと、やっぱりメールが入ってた。

今、名古屋だよ、で、またちょっと仮眠するからと

11時にメールが着信していた。

うーくん、やっぱり時間かかってる感じがする。

予想はしていたけれど、年末の帰省ラッシュで思ったより
時間がかかっているようだ。

それでも、聡が走っているのは上りだから、

まだ下りよりはましなんだろうけれどね。

寝ているかもしれない聡を起こすのも申し訳ないのでメールの返事
は打たなかった

このペースだとやっぱり夕方遅くに浜松だろう。

私の今日の仕事は午後7時まで。

家に帰るまでには着いているのかなと思うけれど。

なんだかドキドキする。

明日は帰って来るのかな？

久しぶりに会って、一体何から話が始まるのかとか
そんなくだらないとしか思えない事でドキドキしている。

バタバタしていたら、あっという間に夕方5時を回った。

年末の買い物のせいか、店内にお客さんは多い。

でも、そんなに売れるわけではないのが年末。

まあ、私でも初売りの方で狙うかな、とは思う。

そんな時、レジ裏の電話が鳴った。

丁度、目の前にいたので伝票に目を通しながら電話に出た。

発信元は見たことない電話番号。どこだろう？

「すみません、そちらに藤田実花さんいらっしゃいますか？」

女の人の声がした、落ち着いた声なのに、なんだか背景に切羽詰まった雰囲気。

そっち、早く！とかなんだか不安になる声が聞こえる。

「私が藤田ですが。」

「藤田聡さんの奥様で間違いないでしょうか？」

「はい、間違いありません。」

なんだか不安で、うなじがざわざわする。嫌な予感。

「こちら愛知総合病院の救急センターです。」

・・・救急センター？・・・

「まさか、何か・・・」

胸の奥が何か膨らんで、何かわかんないけれど

膨らんでいくような感覚。

思わず机に手をかけて、自分を支えた。

売り場に入ってきた店長が寄ってきた。

合図するように口だけで、大丈夫？何かあった？と言っている。

ちよっと我に帰れた。大丈夫と言うように、うんうんと店長に頷いて見せた。

「ちよっとすみません。」

そう電話に言ってから。店長に向かって言った。

「すみません、売り場お願いします。」

店長は、うんと頷きながらレジに入った。

「お待たせしました、藤田に何かありましたか？」

電話の向こうの女性は、淡々と話を始めた。

「はい、高速道路で事故に遭われまして、こちらに運ばれました。」

喉元になにか込み上げる。

動揺する自分と、しっかりしないと思う自分とで、

体の中でざわざわと戦いを始めているような、そんな感覚。

次の言葉を聞くために、ぐっと体に力を込める。

episode 23

なんで新幹線とか飛行機とかで帰ってきてって言わなかったんだろ
う。

今更そう思っても仕方がないのに
考えるのはそんなことばかりだ。

今、考えるべき事はそこじゃないって自分に突っ込みながら。

電話を切って呆然としていると、店長がそっと近づいてきた。

「何かあったんでしょ？実花さん。」

机に体を預けている私の肩に手を添えた。

「名古屋のほうで、聡が事故に巻き込まれて、

今、意識がないって・・・。」

そう言うのと、店長もぐっと息を飲んだ。

「なんで新幹線で帰っておいでって言わなかったのかしら私、
飛行機でとか、もっと時間をずらしてとか、なんで、・」

そこまで言った時、店長が

「実花さん、落ち着いて、今はそんなの終わった事だ。」

そう言って台についている私の手を包むように手を重ねた
温かい手に涙が出そうなくらいホツとする。

そして、間を開けずに店長が言った。

「実花さん、いいから旦那さんの所に行って。」

こっちは心配いらない。今すぐ帰って、急いで。」

そう言って内線で倉庫にいる社員を呼んだ。

「早く、家に帰って支度して出れば、2時間後には着ける。」

「ありがとう、店長。」

それだけやっと言うと、店長は正面から

右手を私の左肩に置いて言った。

「当たり前ですよ。実花さんの大事な旦那さんですから。」

そう言って私をくるっと回らせて、店の外に押した。

「早く、でも気を付けて下さい。」

私は、そっと体を回し店長を見た。

「早く。」

うん、と頷いて、荷物のあるバックルームの方向に走った。

ごめんね、店長、ありがとう。

なんだか涙が出て来た。

自宅に帰り身支度をしてタクシーで駅に向かった。

新横浜からのぞみで名古屋まで一気に行った。

病院に着いたのは、午後8時になる頃だった。

のぞみの中で、紅茶ばかり飲んだ。

口の中が渴く。車内で何を考えていたのか覚えてないほど
気持ちが悪くどこか行っちゃった。

このまま、聡と会えなくなったらどうしようって、
それだけが一番辛かった。

最悪の場合ばかりが、頭の中を巡ってしまふ。
時間外受付で名前を名乗ると、こちらですと
ナースステーションの横の部屋に案内された。

「大丈夫ですよ、さっき目を覚まされました。」

薬で少し朦朧とされてますけれど。」

そう言って半分だけカーテンの開いている入口近くのベッドに
案内された。点滴とかいろいろ繋がっているのが見える。

さっと近づきベッドのそばへ寄った。

ベッドの横の椅子に掛け、そっと囁いた。

「聡、私よ。遅くなってごめんなさい。」

そう言うと、うつすら聡が目を開けた。

看護婦さんが、聞こえましたねと微笑んだ。

ナースコールが鳴っているのが聞こえると

「じゃ、何かあったら呼んでくださいね。」

早足でナースステーションにつながるドアから出て行った。

腕の骨にひびが入っているようだけれど

思ったよりひどい状態ではない事にホッとして

椅子に座ったまま、ベッドに顔を伏せてため息をついた。

「実花、おい実花。」

小さな声で聡が言うのが聞こえ、慌てて顔を上げた。

「ごめん、当たった？痛かった？」

伏せた顔が当たって痛かったのかと慌てて聞くと

「耳、貸して。」

「耳？」

「うん、耳貸してよ。」

「何で？この状況で耳貸すの??」

「いいから、早く。」

薄暗い病室で、聡の顔をよく見ると、おでこに青い痣があった。

その痣に触れないよう気を付けながら、

髪を耳にかけ、口元に耳を寄せた。

ゆっくり呟くように聡は言う。

「実花、今でも君を愛しているよ。」

驚いて思わず、そのまま固まった。

そんな私を見て、聡はくすっと笑った

「俺、後ろから追突されて、前のトラックに突っ込む瞬間

ああ、実花にもう一度愛してるって言いたいって思った。

生きて会えたら、最初に言おうって思ったんだ。」

思わず顔を離して聡を見ると、勝ち誇ったように笑っていた。

泣きたいような笑いたいような、そんな思いが溢れる。

そつと聡の耳元で囁いた。

「馬鹿ね、私の方があなたをもっと愛してるのよ、気付かなかった？」

そう言うと、恥ずかしいのといろんな感情で笑いが込み上げた。
くすくす笑うと、聡は

「・・・チクショー、抱きしめたいのに腕が動かない。」
そう言って舌打ちまでしている。

大丈夫、私たちはまだまだうまくやってけそうだ。
ベッドの上の聡を柔らかく抱きしめた。

聡の匂いを感じるのはどのくらい振りだろう。
涙が出るくらい懐かしいと思った。

episode 24

聡の仕事先への連絡、浜松への連絡。

保険会社への連絡、

そして、店長に電話をかけた。

私の話を店長は、うん、うん、大変だねと本当に真剣に聞いてくれた。

「ごめんね、店長。忙しい時に。」

そう言っていると、何言ってるんですか、とちょっと怒ったようにそう言った。

「実花さん、気持ちは通じそうですか？」

「多分ね。」

「そうですか、残念です。仕方がないけれど。」

そう言っても、でも笑い飛ばしてくれた。

「あのね、店長。多分私、私も店長が好きなんだと思う。」

「なんですか、こんな時に告白ですか？」

店長は噴出しながら話を聞いてくれた。

「でも、それはときめきに恋してただけなんだと思う。」

女として色あせたくない、そんな気持ちは誰だってあるものだと思う。

恋したい自分が店長に頼ってたと思う。

だって店長いい男だもん。」

「それって喜んでいいんですかね？」

「当たり前じゃない、素直に取ってよ。」

店長が大笑いしたのでつられて笑った。

良かった、店長を傷つけたくなかった。

店長にはぴったりのいい女の子に出会ってもらって

幸せになって欲しい。

そんな愛の形があってもいいじゃない？

翌日の昼には、浜松から、聡の両親と、巧が駆け付けた。思っていたよりは軽い怪我で、みんな安心したようだ。

巧は、パパと正月を過ごせない事が不満のご様子で、おじいちゃんに、どこか連れてってあげるから、そうたしなめられてた。

聡も、しみじみと言う。

「あの車も、だてに4WDと名乗ってた訳じゃないから。

まあ、でも、スピード出たらこんなのにゃ済まなかったかな。」これが軽自動車だったらと思うとぞくつとする。

後ろも前もトラックだった。挟まれた聡の車は廃車になった。

巧は、大好きな車が廃車になったのがショックだったようだけれど、車より命が大事とおじいちゃんに諭された。

車なんてまた買えばいい。聡さえいれば。

私たちは年越しを病院で過ごす羽目になった。

年末年始の病院は、帰宅した人も多いらしく

4人部屋に聡一人しかいなかった。

付き添いはご遠慮願いますと張り紙があったので、すぐ近くのビジネスホテルを取って、

消灯までいて、私はホテルに戻って寝ていた。

正月明けの診療が始まったら、自宅近くに転院することにした。

そうしないと、巧が学校に通えなくなってしまう。

巧も思いがけず、浜松で正月を過ごす事になった。

可哀想だと思うけれど、このビジネスホテル暮らしをさせる訳にはいかない。

年末の歌番組を二人で見ていた。

何故か急に思い立って、聡に切り出した。

「ねえ聡、あのね、私たち九州に来ちゃダメかな。」

その途端、聡は驚いたのか

「えええ！」と体を起して、痛みでぐっとベッドに倒れた。

「……何やってるの？」

そう言うのと、しばらく目を閉じて黙ってた。

しばし沈黙、やけに長く感じた。

手を目もとに押さえて、黙りこむ聡に、しびれを切らして話しかけた。

「ダメ？」

そう一言だけ言うと、聡は手をずらしてちらりとこちらを見た。

「いいの？それで。」

意外な答えにびっくりした。

「なんで？」

「俺は本当は一緒に来て欲しかったけれど、でも、

あの頃そんな事とも言える立場じゃないって思ってた。」

私は聡の折れてない方の手を取った。

もしかして今がお互い素直になれるチャンスかもしれない。

「俺、正直思いあがってたと思う。」

会社の女の子の相談に乗って、頼れる先輩のポジションにいて、誘われた時もちよっと優越感だった。ごめん。」

私は黙って聞いた。手を握ったまま。

「なんだか自分がすごい魅力あるオッサンで、嬉しかったんだと思う。」

でもな、信じてくれ。

俺、死ぬかもって思った時、もう一度実花を抱きしめたいって思ってた。

もう一度実花の匂いを嗅ぎたいって思った。」

「匂い嗅ぎたいって……」

なんだか表現がおかしくて噴出した。

「だってそう思ったんだからしょうがないだろう。」

おかしくておかしくて、涙が出ちゃう。

すごく涙が出てくる。

「泣くなよ。何泣いてるんだよ。」

本当何泣いてるんだろう。

なんだか聡が愛おしくて、私からキスをした。

消灯10分前。除夜の鐘と一緒にここでは聞けないのが寂しい。

人は、大事なものを失くして気付く生き物らしい。

近くにある幸せが、当たり前前すぎて分からなくなる。

完全に失くす前に気づいて良かった。

旦那にまた恋したっていいじゃない？そんなのも悪くない。

3月になり、温かさを感じる日が増えて来た。

11月に結婚した奈央には、2月末に双子の女の子が生まれていた。もうすぐ退院という奈央のお見舞いに、産婦人科にやってきた。

昼間は個室で母子同室で、小さな双子は、新生児用の小さな透明なベッドを

2つ並べて寝かされていた。病院の同じ服を着て、同じポーズで寝ている。

「かわいい〜、でも圭司さんそっくりねえ。」

ベッドに腰掛けている奈央は笑顔が溢れている。

「家に帰ったら大変よ、2人いっぺんだもの。」

「うん、佐久田のお母さんが来てくれるけれどねえ、

病院が一番楽だったりして。」

「帝王切開の跡は？痛くない？」

「随分楽になったわよ。さ、食べようよ実花。」

私の持ってきたケーキを紙の皿に乗せて、2人で食べた。

病室はとても綺麗で清潔で、ホテルより居心地良さそう。

「実花、聡さんの怪我はどう？」

奈央が話を始める。

「うん、もうギブスも外れてるし、大丈夫みたい。」

奈央は、そう、と言う感じで頷いて見せた。

「ね、本当に福岡に行くの？準備出来てる？」

なんだか寂しいし、遠いし心配だなあ。」

本当に心配そうに言う親友、ありがたいなあと思うと自然に笑顔で答えた。

「うん、巧の終業式が終わったらすぐに引っ越すから、でも、ほんの4、5年よ。また戻って来るから。」

もう住むところも見つかったし、聡はそこに入ったから掃除して待っててもらおうわ。」

奈央はそんな実花を見て、ため息をついた。

「きっとこれで良かったのよね、やっぱり家族は一緒にいるべきよね。」

巧君は喜んでるんじゃない？」

「友達と別れるのは辛いけれど、また戻って来るし、向こうでサッカーのチームも探してもらったし、

九州に住むなんて滅多にないいい経験よね、きっと。」

「そうよ、きっと、次に会うときは35歳過ぎてるかもだけれど。」

そう奈央が真剣な顔で言うのでおかしくてたまらなかった。

笑って笑って、涙が出た。

「こだわりは捨てた？実花。」

「きっと、毎日会って、愛してるって言ってもらったら忘れちゃう。」

さらに激しく笑ったら、奈央はお腹を押さえて苦笑いになった。

「実花って最高、でも、おなか痛いよ・・・」

お互い笑いながら泣いて、双子が起きるまで楽しく過ごした。

引っ越しの1週前に最後の出勤をした。

勤務時間も終わり、帰る前に、

一人一人に挨拶をし、隣のショップにも挨拶周りを終えてから、バックルームにいた店長を捕まえた。

「今まで、お世話になりました。」

そう頭を下げると、店長は笑顔で

「こちらこそお世話になりました。」

深々と頭を上げてそう言った。

「て、店長、頭上げてよ、ねえ。」

そう言っ腕を掴むと、にっこり笑って頭を上げた。

「とうとう行っちゃうんですね、九州。」

今なら間に合いますよ、まだ。」

「何言ってるのよ、元気でね。いい知らせがあったら電話してね。」

そう言っ腕を離すと、店長から手を握られた。

え？と思っていると、

「実花さんの幸せを祈ってます、いつでも。」

指を絡めてぎゅっと握られた。

「欲しがるだけが、愛じゃない。」

俺はこういう形で愛を示したんです。」

ゆっくり手を離して、何も言えない私に。

「じゃあ、お元気で。」

私は黙ってその場を去った。

何で最後にこんな格好つけるのよ。

もったいないと思っちゃうじゃん。

駅への道を走った。見た目にも気を使わず走った。

涙が出ないように、苦しくなるまで走った。

欲しがるばかりが愛じゃない。

店長のその言葉を思い出し、ふと足をとめた。

そっか、そうだよな。

相手を思いやるのも愛なんだ。

じゃあ、私も店長の幸せを祈ろう。

涙は出るけれど、悲しいんじゃない。

通い慣れた駅が目に見える。

この駅ともお別れだ。

目の奥がつんとするのを無理矢理我慢した。

全部の思い出まるごと抱きしめて生きよう。

そう思うと、笑顔になれた。いい思い出にしたい、ただそれだけ。

巧の終業式が終わり、翌日すべての荷物を業者が積み込んだ。

その日はホテルに泊まって、朝から新幹線で小倉へ向かった。

新幹線口の改札を抜けると、聡が待っていた。

「あ、パパー。」

そう言って巧が駆け出した。

胸に飛び込む巧を、聡が抱きとめた。

その姿を見て、私の胸はいっぱいになった。

良かった、私たちは、取り戻せたんだ。

ゆっくり近づくとき、無言で聡が左手を差し出した。

私も黙ったまま、右手で手を握り、巧は聡の右手と繋ぎ、

駐車場へと歩き出した。

小倉駅の新幹線口から外に出て、少し離れた駐車場に向かう。

港が近く、倉庫や何かの工場らしきものも見える。

「九州に来たんだなあ、信じられない。」

そう言うと、聡は

「後悔してない？」

そう一言呟いた。どう答えようか、そう思いながら、自然に聡の腕をぐっと体に絡めて、腕に頭を付けた。

この街でもう一度、夫に恋しよう。

いつまでもあなたを愛している。

私たちは海からの風を受けながら、事故後に買い替えた車に乗り込んだ。

T
h
e

e
n
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8455p/>

今でも君を愛してる

2011年3月2日09時53分発行